

### 〈資料紹介〉 「源氏物語絵」一〇枚

加藤, 昌嘉

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

106

(開始ページ / Start Page)

4

(終了ページ / End Page)

15

(発行年 / Year)

2022-09-24

〈資料紹介〉

## 「源氏物語絵」一〇枚

法政大学文学部日本文学科が所蔵する「源氏物語絵」一〇枚を紹介する。江戸時代、一七世紀末ごろ、住吉如慶の周辺で制作された源氏絵と推定される（後述）。

寸法、縦約14・2センチ×横約13・8センチ。

裏面には、「ウシ一」「ウシ二」など、宇治十帖の順番を記す墨書き有り。極札きわめだなどの付属文書は無い。

『源氏物語』の宇治十帖の各場面を描いたもの。もとは五四枚セットの画帖だったと推測される。ツレ（他の四四枚）がどこにあるかは調査中。

本作は、墨の濃淡によって描かれた、白描はくびょう絵である。唇や火などには朱が使われている。雲霞には金が使われている。月には銀が使われている（褪色して黒い）。

人の顔、建物、調度品、装束、雲霞の描き方などから判断して、住吉如慶（一五九九～一六七〇年）の作風を受け

継ぐ源氏絵とおぼしい。

如慶筆の源氏絵としては、サントリー美術館の画帖と大英図書館の画帖がある。如慶筆と伝称される源氏絵としては、九曜文庫の扇面画帖、チェスタービーティライブラリーの扇面画帖、白鶴美術館の画帖などがある。

本作をそれらと比較すると、構図、人や物の描き方が近似する。ただし、本作で、薄い水色が使われていない点、木草が淡く薄く描かれている点、月が銀で塗られている点、如慶の画法とはいささか異なる。よって、如慶の周辺（工房か弟子筋か）で制作された源氏絵と見ておく。制作時期は、一七世紀後半～一七世紀末ごろと見ておく。

以下、全一〇図を掲載し、解説を付した。

加藤 昌嘉



第1図 「橋姫」

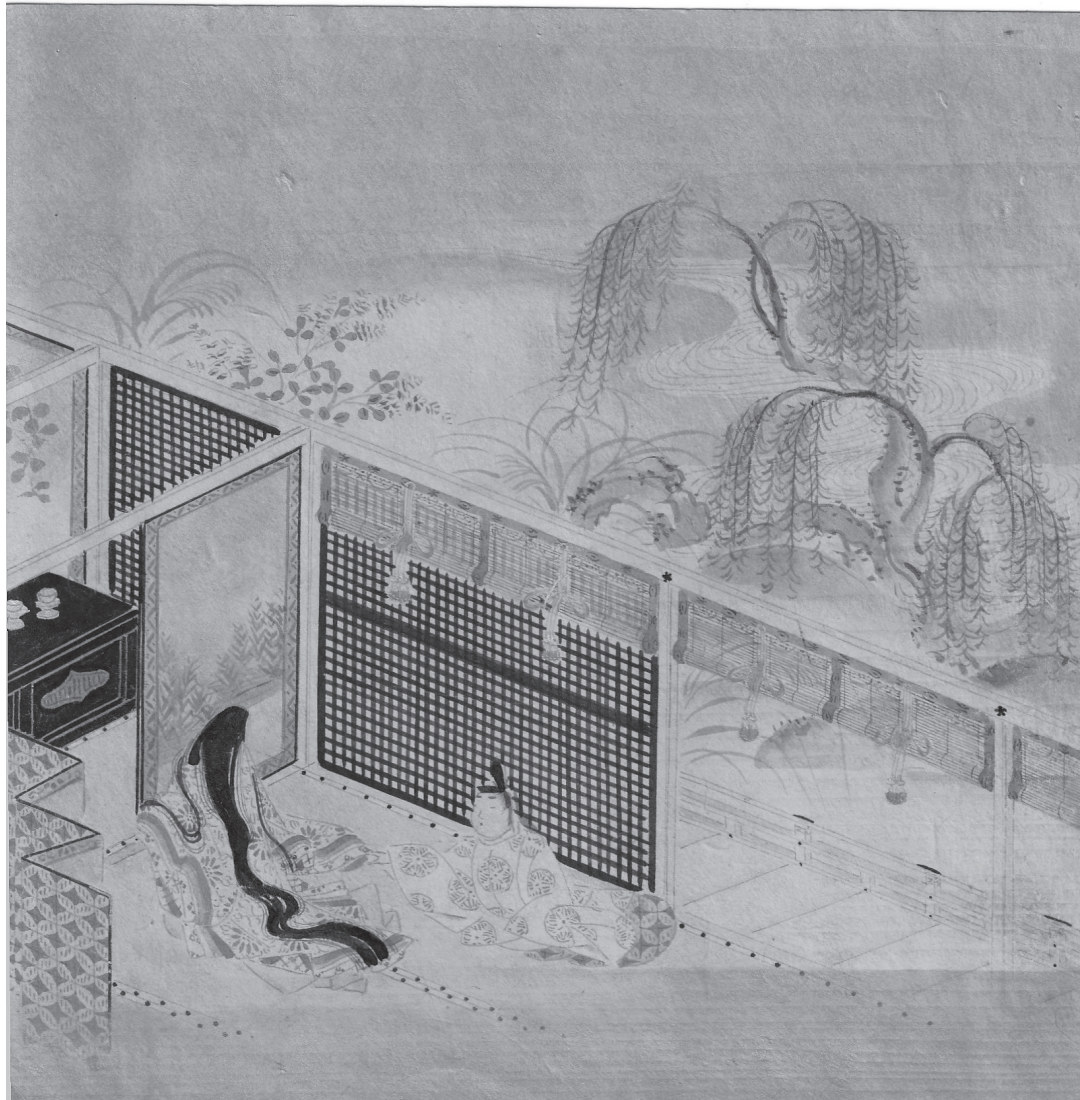
宇治の八宮邸を訪れた薫  
かほる  
 (烏帽子、狩衣) が、大  
 君・中君姉妹を垣間見す  
 る場面。姉妹の前には、  
 琵琶と箏の琴。山の上  
 月(銀)。琵琶の姫君が、  
 撥を持って、月を招くしぐ  
 さをしている。寶子に  
 いるのは女童か。

構図のみならず人や物の  
 配置まで本作に酷似する  
 「橋姫」図として、海の見  
 える杜美術館の源氏物語色  
 紙画帖、宇治市源氏物語  
 ミュージアムの源氏絵鑑帖  
 が挙げられる。ただし、両  
 者とも、極彩色の源氏絵で  
 ある。先後関係・影響関係  
 を精査する必要がある。



第2図 「しいがもと榎本」

宇治の八宮邸で、八宮と薫が語らう場面。八宮は死の近いことを悟り、薫に、娘二人の後見を依頼する。左の男（烏帽子）が八宮（皇子）で、右の男（冠）が薫（臣下。訪問者）と判断できる。山の上に、月（銀）。構図のみならず人や物の配置まで本作に酷似する「榎本」図として、宇治市源氏物語ミュージアムの源氏絵鑑帖が挙げられる。ただし、宇治市本では、薫の右に従者が描かれている。



第3図「総角」あけまき

八宮の一周忌を前に、宇治を訪れた薫(冠直衣)が大君と語らう場面。薫は、隔てを押しつけて大君に迫る。本作で、薫は、逃げる大君の袖を右手で捕らえている。左の部屋は仏間。八宮を弔う仏壇仏具が描かれている。

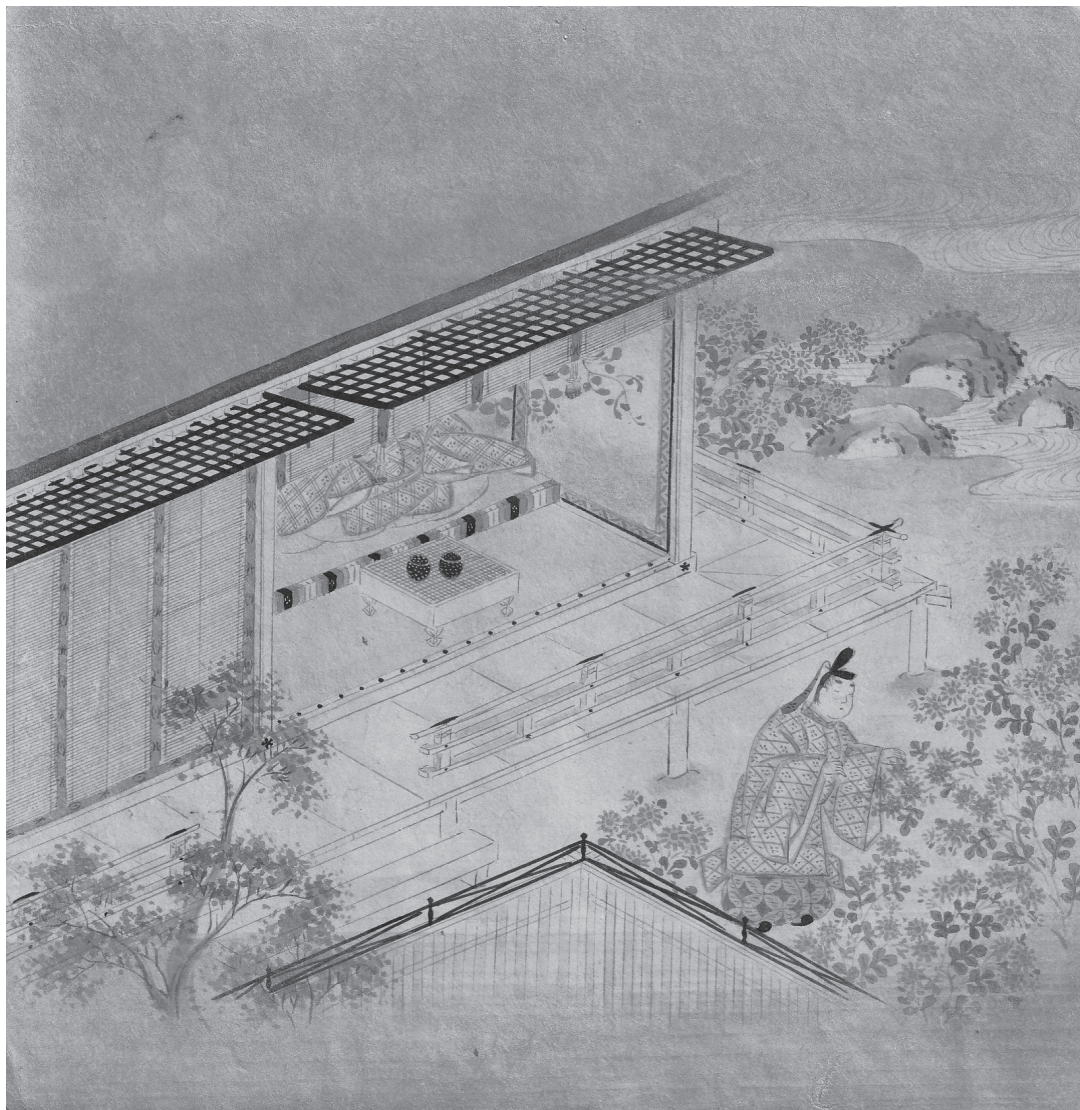
大君の袖を捕らえる薫と隣の部屋の仏壇仏具まで描く「総角」図としては、出光美術館の源氏物語図屏風、九曜文庫の扇面画帖、石山寺の四百画面源氏物語画帖が挙げられる。ただし、源氏絵ごとに、襖障子や屏風の位置が異なる。



#### 第4図「早蕨」さわらび

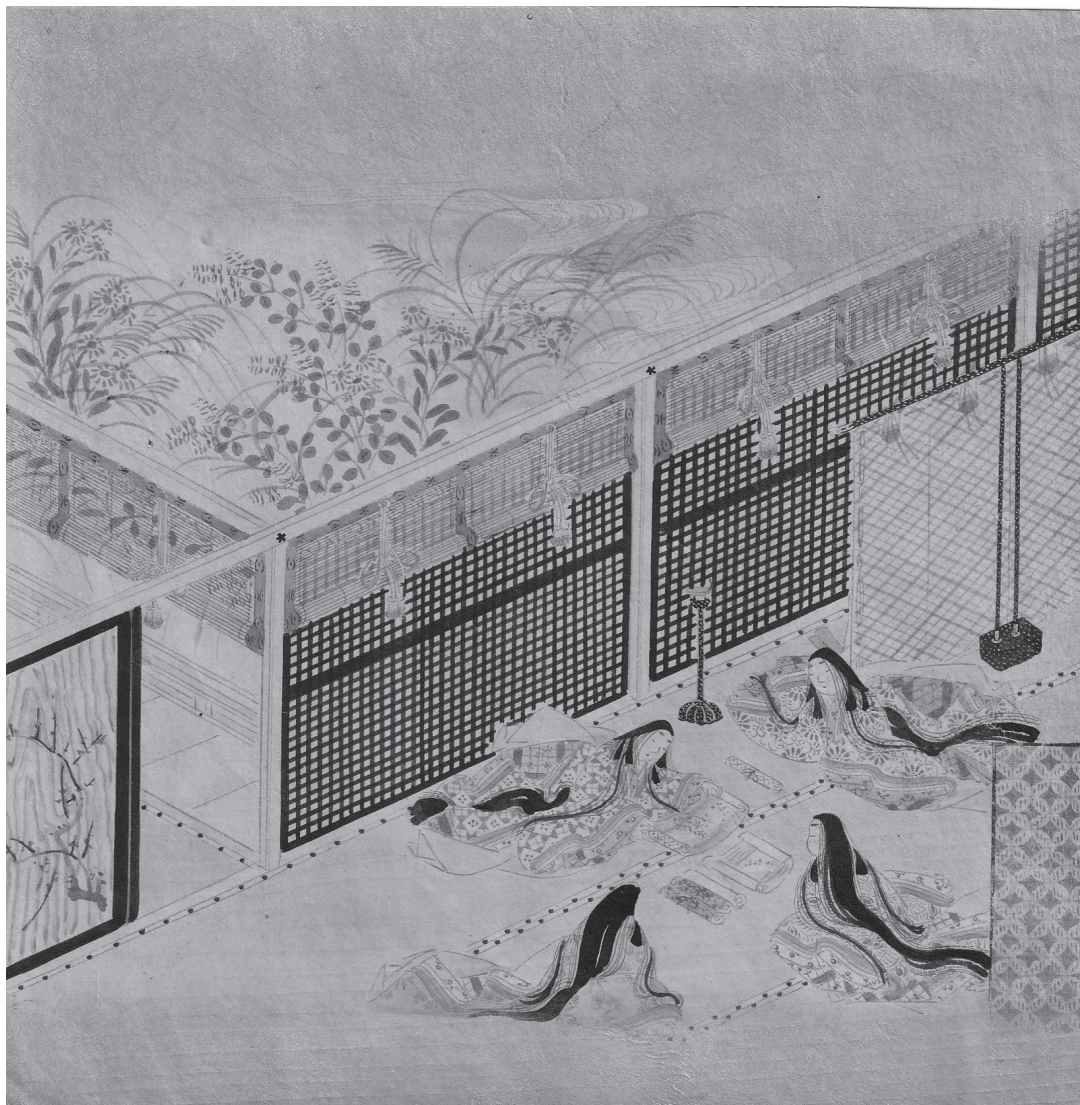
大君の没後、新春を迎えた中君のもとに、山の阿闍梨あじやから、蕨わらび・土筆つくしと手紙が贈られて来た場面。左の、手紙を読んでいるのが中君、簀子すしに置かれていたのが、蕨の入った籠かご。簀子にいるのは女房。庭では、梅が咲いている。

構図のみならず人や物や木の配置まで本作に酷似する「早蕨」図として、海の見える杜美術館の源氏物語色紙画帖、宇治市源氏物語ミュージアムの源氏絵鑑帖が挙げられる。ただし、両者とも、女房が中君の横におり、籠の数が二つになっている。



第5図 「宿木」  
やどりぎ

薫が、今上帝に召され、  
 囲碁の勝負をした後の場面。  
 薫が勝ったため、菊一枝を  
 許される（女二宮の降嫁を  
 許される）。庭で菊を手折  
 るのが薫（冠、直衣）。上  
 げ畳に座っている（顔が見  
 えない）のが今上帝。その  
 前には碁盤。上に碁笥二つ。  
 構図のみならず人や物の  
 配置まで本作に酷似する  
 「宿木」図として、東京国  
 立博物館の白描源氏物語色  
 紙貼付屏風、国文学研究資  
 料館の源氏物語淡彩白描画  
 が挙げられる。

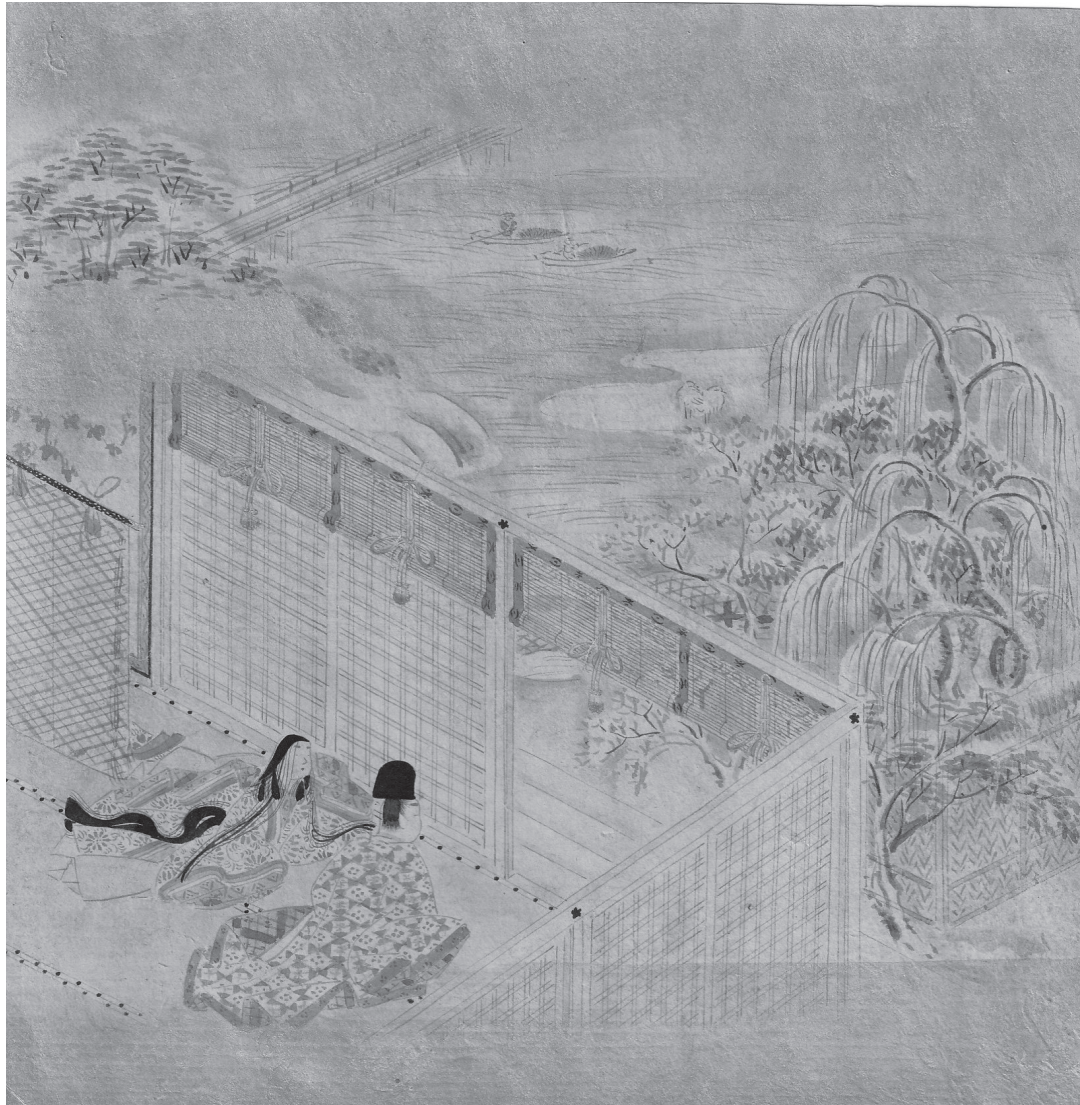


第6図「東屋」  
あずまや

匂宮にぎみやと中君の邸（二条院）に身を寄せている浮舟うきふねが、物語絵を見ている場面。絵巻物を手に取って見ているのが浮舟。他にも巻物が四、五本ある。浮舟の背後には高灯台。その右、几帳の前の女が中君か。背を向けている二人は女房か。庭には秋草。

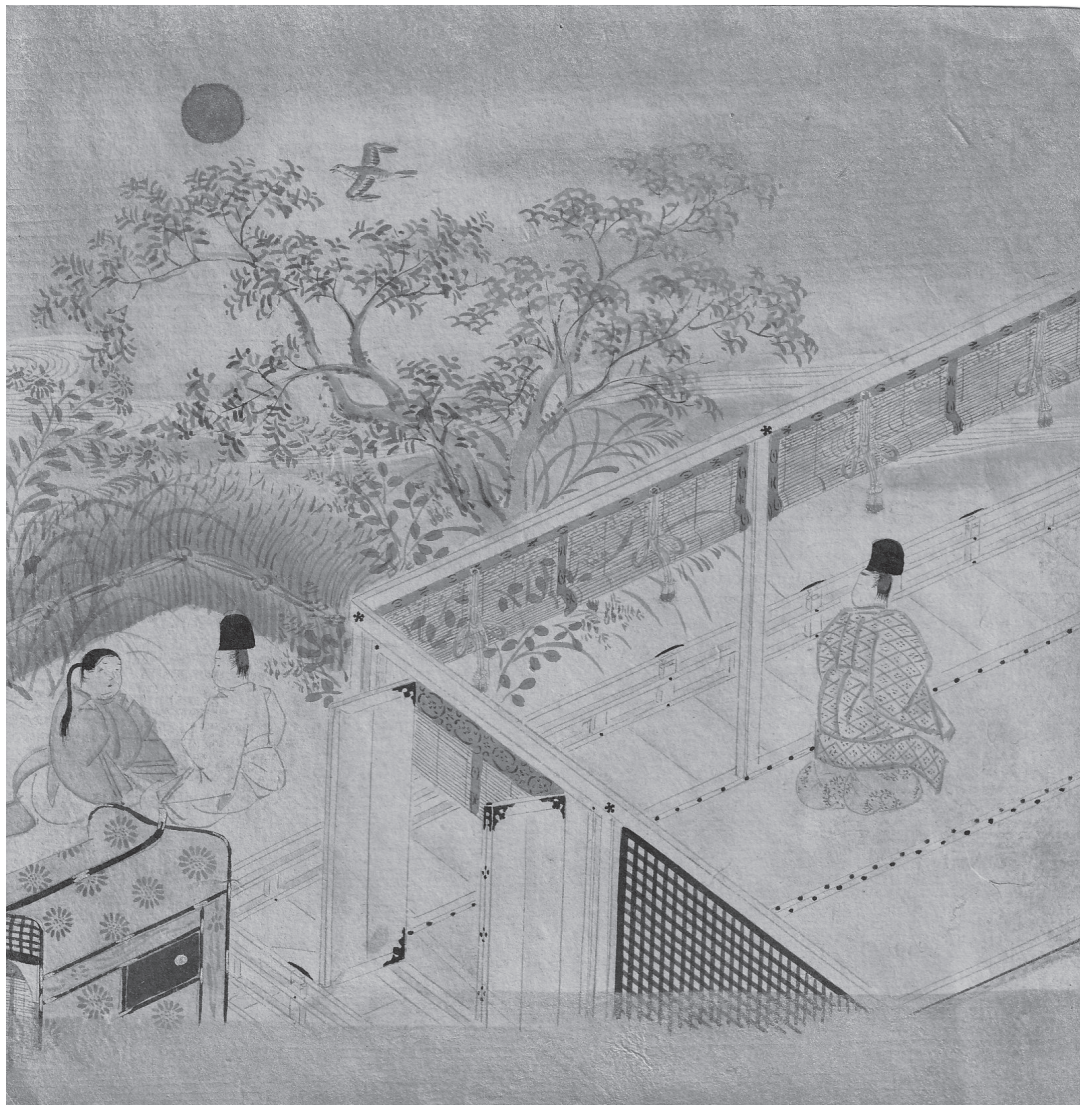
構図のみならず人や物の配置まで本作に酷似する「東屋」図として、サントリ美術館の源氏物語画帖、任天堂株式会社の源氏物語画帖が挙げられる。





第7図 「浮舟」<sup>うきふね</sup>

男が夜具を羽織り、外には宇治橋と柴積み舟。①正月、匂宮が宇治邸に侵入し浮舟と夜を共にした場面か、②二月、宇治邸で薫が浮舟と夜を共にした場面か、③二月、匂宮と浮舟が、対岸の隠れ家で夜を共にした場面か。本作では、中州にかたきき鶴が見えるので②か。だが、木々に雪が積もっていると見えるので③か。或いは、絵師が混同しているか。構図も配置も本作に酷似する「浮舟」図として、海の見える杜美術館の源氏物語色紙画帖、宇治市源氏物語ミュージアムの源氏絵鑑帖が挙げられるが、両者とも、鳥がない。また、杜本には雪がなく、宇治市本では雪が積もっている。



第8図 「蜻蛉」<sup>かかげろ</sup>

浮舟没後、悲嘆に暮れる薫が、彼女を住まわせる予定だった場所で、彼女を偲んで和歌を詠む場面。原文通り、「たちばな」の木と、空を行く「ほととぎす」が描かれている。妻戸の外には車と従者・童。空には夕日（本作の絵師（或いは所有者）は、月と勘違いしたのか、銀で塗られている）。構図のみならず人や物の配置まで本作に酷似する「蜻蛉」図として、九曜文庫の扇面画帖、チェスタービーティーライブラリーの扇面画帖が挙げられる。ただし、両者とも、従者と童が描かれていない。



### 第9図 「手習」てならい

宇治から小野へ連れて来られ、横川の僧都の妹たちと暮らす浮舟が、「門田の稻刈る」様子を見ている場面。左端、筆を持つて手習歌をしたためているのが浮舟。簀子にいる二人は尼。簀子の右奥には関伽棚。

構図のみならず人や物の配置まで本作に酷似する「手習」図として、海に見える杜美術館の源氏物語色紙画帖、宇治市源氏物語ミュージアムの源氏絵鑑帖が挙げられる。頭上に稲束を乗せて運ぶ人まで合致する。ただし、両者とも、硯・筆・紙が描かれていない。



第10図「夢浮橋」ゆめのうきはし

小野で出家生活を送る浮舟と尼たちが、横川から京へ帰る薫の車列を眺める場面。薫は牛車の中。多くの前駆・隨身ずいじんがおり、松明が見える。原文は「いと多うともしたる火の、のどかならぬ光」。

構図のみならず人や物の配置まで本作に酷似する「夢浮橋」図として、九曜文庫の扇面画帖、チエスタビーティライブラリーの扇面画帖が挙げられる。従者たちの数・位置、牛や馬まで合致する。

本作は、場面選択・構図・人や物の配置という点で、海の見える杜美術館の源氏物語色紙画帖、宇治市源氏物語ミュージアムの源氏絵鑑帖、九曜文庫の源氏物語扇面画帖と、高い合致率を見せた。同じ粉本（下絵、手本）を用いたのだろうか。先後関係、影響関係も含め、さらに検証する必要がある。極彩色の土佐派／白描淡彩の住吉派という線引きに囚われることなく、物語絵制作のネットワークを、より広く把握してゆかなければなるまい。

参考文献・参考画像

- ◆ 稲本万里子『源氏絵の系譜―平安時代から現代まで―』（森話社、二〇一八年）の「住吉如慶筆「源氏物語画帖」」。
- ◆ 榊原悟「住吉派「源氏絵」解題―附諸本詞書―」（サントリイ美術館論集）三号、一九八九年二月）
- ◆ 宮崎もも「江戸時代における白描物語絵の展開―住吉派作例と岡田為恭作例を軸として―」（大和文華）一三五号、二〇一九年八月）
- ◆ 大和文華館編『白描の美―図像・歌仙・物語―』（大和文華館、二〇一七年）
- ◆ 辻英子編『在外日本重要絵巻集成』（笠間書院、二〇一一年）のうち、「大英図書館所蔵源氏物語詞」。
- ◆ 中野幸一編『九曜文庫蔵 源氏物語扇面画帖』（勉誠出版、二〇〇七年）
- ◆ 阿部秋生監修『梗概源氏物語』（貴重本刊行会、一九八一年）のうち、「源氏物語歌絵 アイランド国立チェスタービティーライブラ

リー蔵」。なお、「夢浮橋」図が「総角」の所に掲載されるなど、誤りが散見する。

◆ 佐野みどり監修『源氏絵集成』（藝華書院、二〇一二年）の【図版篇】のうち、「4 源氏物語色紙画帖」（海の見える杜美術館蔵）、「5 伝 土佐光則筆 白描源氏物語色紙貼付屏風」（東京国立博物館蔵）。

◆ 宇治市源氏物語ミュージアム編『伝土佐光則筆 源氏絵鑑帖』（宇治市源氏物語ミュージアム、二〇〇一年）

◆ 和泉市久保惣記念美術館編『土佐派と住吉派―やまと絵の荘重と軽妙―』（和泉市久保惣記念美術館、二〇一八年）のうち、「22 源氏物語画帖 土佐光則筆」（任天堂株式会社蔵）。

◆ 鷲尾遍隆監修・中野幸一編集『石山寺蔵四百画面源氏物語画帖』（勉誠出版、二〇〇五年）

◆ 国文学研究資料館ホームページ内「館蔵和古書目録データベース」のうち、「源氏物語淡彩白描画」。

◆ 『週刊 絵巻で楽しむ源氏物語五十四帖』（朝日新聞出版、二〇一〇―二〇一三年）のうち、「48 橋姫」～「60 夢浮橋」。

付記

日本文学科の小林ふみ子先生を通じ、田沢裕賀先生、宮崎もも先生より、本作について貴重なご意見・情報を賜うことができました。記して御礼申し上げます。

（かとう まさよし・本学教授）